

市民の手で文化のみえるまちづくり

姫路文連 ニュース

季刊 2014年 春号

編集・発行
姫路地方文化団体連合協議会
(姫路文連)事務局

〒670-0935
姫路市北条口3丁目5
みどりビル1F (姫路労音内)

姫路地方文化団体連合協議会会報(第41号)



川柳舞踏『てる姫厨文…官兵衛サマ参ル』川柳舎・みみひめきっちゃん
4頁に関連記事掲載

25年度姫路文化賞受賞式

第49回姫路文化賞受賞式が12月1日鹿嶋殿で開催され、82名の参加で盛大にお祝いしました。姫路文化賞も数を重ね、来年は、50周年を迎えます。

第49回 姫路文化賞 相生ペンの会(文芸)
坪田政彦(現代美術)
文化功労賞 上田眞子(地域文化)
遠周章(文学)

第31回 黒川緑郎賞 久保健史(彫刻)
納屋工房 長谷川香里(地域文化)
西川都子(陶芸)
八重尾雄太(音楽) の方々に受賞して頂きました。



選考経過報告、受賞式、乾杯に続き受賞者紹介と挨拶を受け、和やかな中、八重尾さんの音楽、作品展示、恒例の受賞者による餅搗きで盛り上がり、搗き立ての美味しいお餅を戴いて散会しました。



播磨地域でコツコツと地道に活動を続けて来られた受賞者の皆さんの、生き様に感動し文化、芸術の奥深さを学ばせて頂きました、健康に留意され、ますますのご活躍ご健闘を誓い合う会となりました。

姫路文連副会長 松本英治



2014年度総会開催報告

2月16日(日)午後2時より、ホテル姫路プラザ会議室において、2014年度総会が開かれました。第1部は定期総会で、参加者は24名。昨年度の活動状況、会計、監査が報告され、全会一致で承認。続いて新年度の方針案と予算案が提案され、これも異議なく承認されました。

引き続き、第2部として、講演会が開催されました。講演者に加古川の名刹、鶴林寺の幹栄盛長老を迎え、平和憲法についてのお話をいただきました。37名の参加者は、戦争の悲惨さや残酷さ、そして現在の平和がどれだけ有難いことか、心に刻まれたことでしょう。いくつか質疑もありましたが、もう少し時間があればもっと意見交流ができたように思います。憲法9条を骨抜きにしようとしている現政権に対抗するには、学習と団結以外にありません。より一層このような講演を聞く機会をつくっていくことも文連の責務だと思いました。

第3部は会員懇親会です。いつもながら会費額に見合わない?量も多くて美味しい料理と美酒で、多いに盛り上がりました。恒例の自己紹介では、多種多様な活動に携わっている参加

者の個性たっぷりのスピーチに、会場内は爆笑したり、聴き惚れたり…。楽しいひと時を持つことが出来ました。

最後の最後は、文連宴会名物?の「男はつらいよ」の替え歌でめでたくお開きとなりました。来年の総会も多くの参加で盛り上がりたいですね。

※特別に歌わなかった2番、3番も掲載します。

憲法変えようと安倍ちゃん言うが 国民そんなこと思ってない
戦争終わってもうすぐ七十年 平和な日本がありがたい
平和で自由で平等な 日本を目指して
目指して世界の国々と お付き合い～

秘密は隠すと安倍ちゃん言うが 何が秘密か解らない
そんな法律つくって何を 何を隠そうとしてるのか
言論の自由と知る権利 国民みんな
国民みんなを守りましょ 守りましょ

解釈変えようと安倍ちゃん言うが 9条の解釈揺るがない
不戦の誓いは世界の国で 目指して欲しい理想です
領土や経済問題も 言葉の力で
言葉の力で解決を 目指しましょう

(報告 加茂田陽一)

Bunren Reports III

茶座「いま・はりま」第8弾 生活と文化と老舗 —伝統からの発信—

第4回 10月8日(火)

「龍野の醤油とマルテンの歩み」



寛政7年(1795)創業、二百有余年の歴史をもつ日本丸天醤油(株)の岡上豊社長にお越しいただき、「龍野の醤油とマルテンの歩み」と題し、日本の食を支える醤油について、醤油とはそもそも何ぞやということ、その起源から、醤油の種類と分布、淡口(うすくち)醤油の特長と普及した経緯、醸造の工程などを、とてもわかりやすく教えていただき、日ごろわれわれの口に入るものでありながら知らずにいた醤油の奥深さを知って大いに感銘をうけた。もうひとつの龍野の名産であるそうめんと関連する「めんつゆ」の、水でうすめずに使うストレートつゆの開発など面白い話であった。

第5回 11月5日(火)

「温故創新」～いちずの酒づくり～ 田中酒造場」



天保6年(1835)創業、「白鷺の城」や「名刀正宗」「亀の甲」といった銘酒で知られる田中酒造場の田中康博社長をお招きし、酒づくりについて、さまざまなお話をうかがった。「亀の尾」という原料米のサンプルを見せていただき、米にたいする思い入れの強さ、酒づくりによって米をつくるお百姓さんを応援させていただくのだという田中さんの言葉に感じるどころ大きく、日本酒のすばらしさをより深く知る機会となった。お造りなどの料理をいただくときに醤油に酒をすこし入れるとさらに美味しくなることや、酒の爛の具合など、聞いてすぐさま役立つ話もありがたいことであった。

千田草介

姫路文連創立50周年を記念して 茶座「いま・はりま」第9弾

姫路が駅前開発や新しい文化センターの建設問題など大切な時期を迎えている今、今年9回目を迎える茶座は、「地域と文化」、「文化行政」、「公共文化施設」、「創造制作者と市民文化」など、**これからの姫路と文化について**、講師を招き開催しようと準備を進めています。

ご期待頂き、多くの方々のご参加を頂けますようよろしく願いいたします。

Bunren Reports IV

文連忘年会

昨年12月20日夢前川駅近くの八菜香というお店で文連忘年会がありました。私自身、文連の忘年会に参加するのは初めてで、いったいどんな忘年会なのだろうと興味津々でした。八菜香という店なので中華かなと覚悟して行きましたが(私は和食が好きなので)実際、中華料理屋さんだったみたいですが出てきた料理は和食で、美味しかったです。日本酒も美味しく私としては結構、飲んだ方でした。

参加者は14名で、さすが文連という感じで、いろんな事に興味を持っている人が多かったり、何か縁があるのか初めて出会った人が自分の尊敬している人のお孫さんだったりとかうべきして会ってる気がしてしまいました。

皆さん自分達の世界でがんばっている方なので私には新鮮でした。参加者が14名だったので何組かのグループになってしまい交流が出来ない人もいたのですが文連の会員宅で二次会をしてくれたので話せなかった人とも話せて実りある忘年会でした。

心ときめく人との交流が出来る文連に感謝です。

姫路労音 大西ひろみ

“賑わいステージ (ひめじ官兵衛プロジェクト)”で川柳舞踏を上演！

情野千里 (川柳舎・みみひめきっちゃん代表)

1993年に、川柳パフォーマンス活動の推進母船となるべく〈川柳舎・みみひめきっちゃん〉を立ち上げました。姫路市を中心に、国内外で舞台制作を続けて22年目の今年、初代の姫路城主・黒田官兵衛がNHKの大河ドラマとなって放映されています。

去年の秋頃でしたか、黒田官兵衛の世界を川柳パフォーマンス(川柳舞踏)の舞台に仕立ててを思いつきました。

オランダ、タイ、韓国、フランス・・・と、川柳舞踏(川柳という言葉×舞踏という身体)を核とした舞台を各国のアーティスト達と共同制作して来ましたが、創作の軸足は常に姫路市に置いてあります。ほんの500年ばかり前、わがホームタウン・姫路で、無駄に人を死なせぬために官兵衛さんは智略をめぐらせ、縦横に地を駆けまわったのです。

資料を読むにつれ官兵衛さんの姿が近づいて来る今こそ、作品化のチャンス・・・！

川柳舞踏『てる姫厨文…官兵衛サマ参ル』は、官兵衛が有岡城に幽閉されていたころの物語です。側室を持たず、正妻・てる(光)だけを愛した官兵衛——。行方知れずになったまま一年が来ようという時、てる姫は官兵衛の無事を祈る手紙を何とかして届けようとしします。てる姫の夫恋う心情に打たれ、力を貸すのは古くから姫山に棲む厨の女神や火男たち。作中で演じられる“童遊び・たんすながもち”は、川柳による歌垣です。出演者がしゃべるセリフや川柳は播州言葉や姫路弁を意識して取り入れました。



京都などでは能舞台で演じる機会もあるので、作品は新作狂言やお神楽の形態をとることが多くなります。これもそういった伝統芸能の様式を踏まえた25分ほどの作品です。

「あらたたらふく 腹がずつない・・・」と、出演者全員が歌って踊る「播州おごっそ祝い節」(作詞：情野千里&播州おごっそ研究会、作曲：大石准良)は、兵庫県各地の海山の食材やお料理がふんだんに登場します。1月18日の“賑わいステージ”では一緒になって踊ってくれる人もいて、寒風吹きすさぶなかで舞台を務めたメンバーも感謝感涙(鼻水?)アメアラル。

5月、6月、7月の第2土曜日には、“賑わいステージ”で舞台を披露できそうです。お時間がございましたら、是非のお運びを・・・。



今 思うこと



「たった一本」

遠藤 章

と云うのは、在りし日の私の連れが一本のフタリシズカの苗を庭隅に植えていた
ときのことである。「それっ、たった一本か」と口走ってしまった私。「そうよ、
それがどうしたの」とあっけない連れ。悪かったのか「たった一本か」の一言の本
音は、一本を侮っていたのだ。

フタリシズカはセンリョウ科の多年草。初夏になると、小雪のような花をつけた穂
が、二本に別れて咲き、さも二人静かに手を取り合い行く年を過す。連れは二人の
ための記念にするつもりで植栽をはじめたのだ。

「そうよ、そんな意味なのよ」と、白い指先で丹念に土をあしらえて、可弱い苗を
庇うように話しかけの振り。

冬枯れした春、その庭先にツクシのようににゅっと太い芽が頭を出した。6月頃緑
の草木の中、一入に冴えて咲いたフタリシズカ。その翌年には五・六本に増え、毎
年驚くように繁っていった。

別段に肥料を加えないのに、その繁殖に目を丸くした。それでも適^{たま}には、と一撮
みの肥料をふりかけたその次の年には、何と二人静が三人静になって咲くのには目
を疑った。花軸が三本に分かれて仲よく咲いている。肥が効いたのだ。植物は正直
なんだ。連れが逝^{せい}して、或る年は繁くに又年には閑疎になり、そんな繰り返しの日々。

先日、東日本大震災後三年目の写真ニュースで目に留ったのは、岩手県の「奇跡
の一本松」で、「たった一本」のフタリシズカと重なった。松は奇跡的に津波に耐
えて残った。強い生命力に胸をはって、人々に希望と勇気を放っているかのようだ。

「たった一本」に期待し 願いを込める。在りし日の連れはいないが、春を待ちど
おしくしてフタリシズカが私に何かを語りかけている。ひよっとすると連れの声か
も。力強い老いへのメッセージかも。